



挨拶にたつ西堀会長

## 成瀬岩雄氏ら五氏に名誉会員章

昭和53年度年次晩餐会

日本山岳会恒例の年次晩餐会(昭和五十三年)が昨年十二月二日(土)、東京新宿の京王プラザホテル五階コンコードボール・ルームで二七六名の出席者を得て極めて盛大に行われた。

前年から既に和気あいあいだった。年次晩餐会は定刻の午後六時より高遠宏担当理事の司会で、まず西堀栄三郎会長によって会員総数(三四八六名)と物故者十一名(別掲)の氏名が読み上げられ、本年度の物故者に対し全員で敬虔な黙祷が捧げられた。

この年次晩餐会に先きだちこれも恒例になった『この一本展』『簡易バー』なども開かれ会場は開会

会場の現状報告(会務報告)が行われた。その内容はつぎのとおりである。

①会員各位の絶大なる協力により新ルームが完成、一月二十九日に移転を完了、三月十一日その披露パーティが盛大に行われた

②近藤信行氏の努力によって『新選覆刻日本の山岳名著』が完成した。

③近くNHKの招きでサー・エドモンド・ヒラリーが来日する。会としても何か会合をもつ予定。

ひきつづき名誉会員並びに五十年以上在籍の永年会員の推挙と発表が行われ、それぞれ名誉・永年会員章が会長から手渡された。本年度に推挙された名誉会員は成瀬岩雄、後藤幹次、藤島玄、角田吉夫(欠席)、津田周二の五氏、それから永年会員として発表されたのは、交野武一(二〇六八)、菊地正蔵(二〇七八)、笠原藤七(一



1979年(昭和54年)

1月号(No. 403)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150円

### 目次

- 昭和53年度年次晩餐会—
- 成瀬岩雄氏ら五氏に名誉会員章……(1)
- 恒の終わり—飯豊連峰を歩いて—  
(藤島玄)……(2)
- ブラヴアンド氏の山案内手帳(2)  
(岡沢祐吉)……(4)
- ルーム基金応募者ご芳名(15)……(5)
- 20周年記念の会・二つ  
(成瀬岩雄)……(6)
- 図書受入報告……(8)
- 図書……(9)
- 三つの記念出版(島田 巽)  
コンサイス山名辞典について  
報告……(9)
- お知らせ……(10)
- 会務報告・ルーム日誌……(11)
- 会員異動……(11)
- カット/谷アユ子

#### ▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時  
水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

#### ▶図書室開設時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日  
13時～20時

## 山をきれいに「三」は持ち帰ろう

成瀬岩雄名誉会員代表の挨拶  
長い間、会の役員などもやってきましたが、決った事をやっただけで特に会のためになるようなことをしなかったにもかかわらず

多勢の会員をさしおいて今回名誉会員に推挙させていただいて、私は今、大変感激いたしております。これでまだ足もすっかりついていまして、登高山がもくもくと湧いてきました。私は今までたくさんの山に登っていますが、最近では登っているというより若い人と一緒に、むしろその人達に登らせていただいていると思うんです。この点若い人には大変迷惑かと思いますが感謝も致しております。今後ともよろしく、この席をかりてお願い致します。

交野武一永年会員代表の挨拶  
しばらくフランスに行って東京に帰りまして、そこで永年会員にするということで、この私もそんなに年をとった覚えはないのですが、考えてみますと書生の頃に野口末延さんにお誘いを受け木暮先生に紹介していただいて会員になって以来二分の一世紀たったわけです。永年会員というのは私なりに考えて見ますと「もうお前は年をとったからあんまり役に立たないから足を洗ってよ」よからう。そのための褒美かな」という受けとめ方をしましたが、とにかく私も成瀬さんと同じく丈夫です。で、これからも活動したいと思ひますし、会のためという事を考え、

絵を通じて森林保護とまでいかなくても自然にさからわれないように余生をつくりたいと思っております。

#### 各名譽会員のスピーチ

△藤島玄氏▽この席を借りて皆さまにお礼を申し上げたい。第一番目に私がここまで来られたのは先輩達にどれだけ教えられたかという事。それからもうひとつは、なにか名譽会員になるための貢献点があったとしたらこの席で越後支部の会員にお礼を申し上げたい。私を立ててくれた大勢の会員への一番のこれが感謝のしるしになった。大体、その人たちが「玄サン」についてきてまあよかった、大体間違わなかったと、そういう事が証明されたような気がいたします。

△後藤幹次氏▽まあ、とにかく長生きしたためにこういう名誉をいただいたのではないかと思いますので、これからも精進したいと思っております。厚くお礼を申し上げます。

△津田周二氏▽私がまだ二十歳前後の時に本屋で山岳会の「山岳」を読み出したのを今思い出しております。その時から私が山岳会に入り、かつ五十年を過ぎ、名譽会員になったということは面はゆい事でありませう。どうも有難うございました。(文・写真/小倉厚)

▼物故者 山口振郎、中野征紀、深田志げこ、永谷義三、杉山孝、

町田立穂、久保利夫、四谷竜胤、中山沖右衛門、小暮勝義、河西栄子  
\* 年次晩餐会出席者名簿と「この一本展」内容は後刻紹介します。

#### ●新名譽会員紹介

成瀬岩雄氏 明治三十八年生、東京出身、成蹊高校を経て東北帝国大学卒、大正時代から山に親しみ大正十五年三月抜戸、笠ヶ岳、南岳登頂、昭和二年七月知床岳登頂、大島亮吉氏のパートナーとしての山行もある。昭和三十年五月、マナスル登山準備のため本会からネパールに派遣される。昭和四十八年夏、スイス・アルプスに遊びメーニヒに登る(六十八歳)。ここの数年はもっぱら南会津、東北のひと気ない山や峠の遍歴をかさねる。著書に「山・よき仲間」(昭和三十七年刊)があるほか「山岳」と会報に寄稿が多い。

大正十二年十一月本会入会、会員番号八六五、多年理事、評議員をつとめ昭和四十六年以降二年間副会長となる。昭和四十八年永年会員。

後藤幹次氏 明治三十八年生、山形市出身、早稲田大学専門部商科卒、(株)旅館後藤又兵衛社長。

大正時代から登山をし、早大山岳部時代大正十四年十二月第二回針ノ木大沢小屋生活、大正十五年三月槍ヶ岳、同年八月東北朝日連峰の縦走をなし、昭和三年帰省後は

蔵王、月山、鳥海山、吾妻連峰、朝日、飯豊等を四季にわたり跋涉した。山形山岳会長、山形体育協会評議員、山形県山岳連盟会長、山形県自然環境保全審議委員、昭和四十二年九月藍綬褒章、昭和五十一年四月勲五等双光旭日章を授与された。

昭和二年六月本会入会、会員番号一〇二四、昭和二十五年四月以降現在まで山形支部長をつとめ、またその間多年評議員をつとめた。昭和五十二年永年会員。

藤島玄氏 明治三十七年生、本名源太郎、新潟市出身、高等小卒、大正八年新潟鉄工所に勤務、昭和四十年定年退職。大正年代より南北アルプス、東北等の山々を登り、ことに飯豊連峰をはじめ越後の山々には四季を問わず足跡あまねく未踏の溪谷を探り紹介した功は大きい。新潟岳連顧問。著書に「飯豊・朝日連峰」(ガイドブック)、「越後の山」及び飯豊、越後の山の登山地図などがある。「山岳」と会報にも寄稿が多い。多年登山界に尽した功により昭和五十一年十一月勲六等単光旭日章を授与された。

昭和二年六月本会入会、会員番号一〇三三、昭和二十一年十二月越後支部創設以来現在まで支部長をつとめ、またその間多年評議員をつとめた。昭和五十二年永年会員。

角田吉夫氏 明治四十年生、東京出身、法政大学卒、大正年代から登山をはじめ法政大学山岳部リーダーとして活躍。北、南アルプス、上信越、秩父に足跡が多い。昭和三年三月穴毛谷から笠ヶ岳登頂。同年八月石狩川上流の山々を登る。上越国境の積雪期登山のパイオニア。著書「上越国境」(昭和六年刊)は上越の山の最初のまとまった案内書として広く活用された。「山岳」と会報への寄稿も少なくない。

昭和二年九月本会入会、会員番号一〇四六、昭和五年七月幹事、後理事或いは評議員として「山日記」と会報の編集に尽力した。昭和五十二年永年会員。(望月達夫)

## 一 棺の終り

——飯豊連峰を歩いて——

藤島 玄

飯豊連峰連続五十年登山記念に

全部足駄ばきで通した。

最初に登ったコースを辿ってみたのは昭和四十九年の七月末だ。会津の川入口から飯豊本山、大目岳往復、切歯尾根を辿って長者原へ下山した。以後も歩き続け、今年十一月一日に満七十四歳になる。

飯豊連峰の主稜の道は果してそうであらうか。長年歩きつづけて疑いながら、花崗岩以外の岩の分布に注意が不足していた。泥板岩と粘板岩、そして石英粗面岩の露

戸市出身、関西大学中退、大正初期から登山をはじめ、大正十四年兵庫スキー連盟を創設、神宮競技大会の兵庫スキー選手となる。同年RCC入会、翌年理事となる。昭和四十二年日米合同アラスカ遠征登山隊長。兵庫山岳連盟名譽会長。昭和五十二年九月、神戸市文化賞(山岳)を受賞。

昭和二年十月本会入会、会員番号一〇四九、昭和七年理事となり関西支部設置に尽力する。戦前戦後を通じて多年会務に尽した。昭和五十二年永年会員。

頭も狭少な場所に限られていることを確認できた。

次の一つは、登山施設としての縦走路の現在を認識することだ。必要上私の鈍で最少限度に伐った山道が何本もある。それが無類なほどに乱れだらけでいた。その反面、昔ながらの道が二メートルも掘り下げられたまま使われていた。

要は、現代登山者の大部分が、その山のその時に相応しい履物の選択と、道を知らぬ無知からの自然破壊が絶体部分をなしていた。道がある以上、できるだけそれを踏んで、高山植物帯の地肌を、ほしいままにドタ靴で踏み荒さぬ自制心がほしいのだ。その意味では、白衣の登拝者や溪流釣りの人たちが、足の使い方は遙かに上手で、足跡ひとつ残さない。

それと禁止地区に幕営の跡が目についた。こいつ、うまい場所を見つけて、上手に寝たな、と感心するような跡はひとつもない。舌打ちして、このばかもんと怒鳴りつけた跡ばかりだ。一番悪い雨溝をばかのひとつ覚えて掘り、後はお構いなしだ。

もうこうなつては、ゴミ会議の清掃運動の限度を越えている。しかし、対策はある。登山者の功利心を利用した、出羽三山の月山の登拝路がよい模範になっている。

飯豊日記  
十月五日 曇 杓差小屋泊

大倉寛会員の厚意で厚生年金会館に泊った名古屋市の会員小出、近藤の二女性を乗せ、亀田町の立川会員の家を出たのが五時半だ。

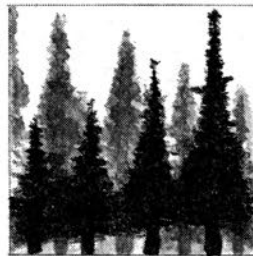
新潟平野の稲刈りは終り、藁を焼く煙りがたな引く曇天に、肩幅の広い二王子岳が高い。今年完成の大石ダムを経て車の終点七時半、先着の関川山の会の渡辺竜吉会員と土建社長、民謡のうまいアネサほか二人。こちも二人の若衆がつき、一行は十一名となった。東俣川を渡り、昨年の杓差登山に発電機を持ち上げて盛大な前夜祭をやった三吉平を過ぎ、東俣川を渡り返して、カモス峰の登りとなる。

スキーと同じく二本杖のアネサを先頭に、関川組が先頭。私のマイペースで女性二人が中で、立川が後で締める四人組が続く。北五葉と樺の急坂の高差約五〇〇メートルのカモス峰に出て中食。白雲が拡がり、照ったり曇ったりだ。千本峰の雨量測定所を越すと東俣川の大沢の三段ノ滝が見え、前杓差岳の草紅葉を頂点に、紅と黄の紅葉が輝いたり、くぐもったりしていた。

初雪の吹く寸前の草紅葉  
長い緩登をつづけて長者平の草紅葉の真只中に立つ。散点する小池は潤れ、吹く風は冷たい。一投足の杓差岳頂上から、ころげ落ちるように杓差小屋に入る。五時四十五分だ。もう小屋は清掃され、炊事の燃焼音がこもっていた。壮

大な夕焼け。粟島灯台の閃光。新発田市から村上市につづく街の灯、寒さに慣れぬみんなは、寝袋に入ってから、よく屋外に立った。

十月六日 曇 梅花皮小屋泊  
病身の小出はよく調整できて、ここまで堪えてきて元気。この先の急坂は、女の腕まくりだ。基部まで緩登で詰めて、後は一気だ抜ければよい。そのコツが解ればなんのことはない。朝焼けも気にせずゆっくりと出発。すぐ近い玄翁寿像碑前で記念撮影が七時だ。見上げるように高い針立峰をな



んなく越し、頼母木川から足ノ松尾根を登ってくる道と接続する大石山へ急降、緩登して長い休みをとった。ナナカマドの実が赤い。マツムシソウの紫の残花を見る。長い緩登は東俣川と頼母木川を交互に指呼させ、廻った昔話と、紅葉の観賞で過ぎて、頼母木山下の西俣峰道の分岐点で中食。もう十一時を少し廻っていた。

ここまで花崗岩だが、この先から頁岩が混つてくる。北地神に出で丸森尾根道を合せ、地神山の三角点に立つ。頂稜の左右を掴む道

は初冬のお花畑だ。今ごろ咲くハクサンイチゲ、濡れたチングルマの白い羽も、コバイケイソウの焼火箸のような幹、ニッコウキスゲのふくらんだ実、偃松の下のコケモモの紅葉。月が淡い下の谷に、黄葉を飾る白い肌の岳樺の疎林。扇ノ地神につづく峰に胎内山と磨いた石柱がしょんぼり建っているのはどういふ訳か。新築二階建の門内小屋に入る。若い衆の足をひき止めるような美人揃い、仙台の女子大学生四人が休んでいた。

門内池、ギルダノ池と断層線にできた二重尾根の底の池を見下ろして、北股岳は越後側から詰め、最後は急崖の危路を搦んだ。時々襲う霧はもう粉雪と同じだ。偃松の枝が絞るとる霧水かな。北股岳の鳥居を後に一段下る。霧が霽れ、洗濯平の多彩な裾がりの上に、大日岳の重厚な肩の辺りが浮び上ってきた。頂上へ戻って十文字鞍部へ急降だ。深く乱雑に拡がった道は、粘板岩を洗い流した花崗岩塊を剥き出しにしていた。

五時半に着いた梅花皮小屋も、われわれの独占だ。遠い水場へ若衆は走り、炊事の熱気が二階にこもり、盃はしきりに廻った。

十月七日 小雪 切合小屋泊  
寒い夜は明けた。月山の丹頂を後に見せる朝日連峰は後になり、蔵王火山群山を真横に見る。今日の天気は面白くない。全体の日程を緩め、脚に余裕のある連中は、

御西岳から大日岳往復が組み込みであるが、この風向きでは見込みなしだ。稀品イワインチン、チシマジキョウ、クロユリ、タカネウスキソウの姿はなく、濃緑のガスコランの群れが薄雪の下に透けて見える。低い霜柱を踏んで梅花皮岳を急登、つづく鳥帽子岳は七時に近い。亮平ノ池への長い下りも溝状に深くなった。下り口の深田久弥一家が築いたケルン、頭欠けだが、基部は残って懐かしい。潤れて浅い亮平ノ池で、石転び沢大雪渓を詰め、ここで露営した大阪市の岳友を偲んだ。杓差小屋以来、ひとつひとつが私には懐旧のことだ、と同行者に語った。御手洗ノ池から天狗ノ庭に出る。こちも荒れ放題だ。天狗岳の肩へ出ると今年新築の御西小屋が高々と見えて、飯豊本山から玉川へ走る切歯尾根のぎざぎざの突起が目前に。寒風に追いつけられ、覗きに向くと、峡谷の飯豊川を隔てて二王子岳、赤津山、そして大日岳が、霧の幕を巻上げたように瞥見された。雲の上は青空だが、霧の中の縦走はそうはいかない。吹き上げる薄い吹雪に、片手が凍るように冷たくなった。

霧雪なる熟語ありやと友の声。御西小屋は二階建て、窓が多くて明るい。十時半だ。大日岳往復の時間はあるが、この霧雪の中では視界皆無で、立つ者もない。外がやや明るくなって小屋を出



る。御西岳の平頂は雪の薄化粧。白幕の切れ間に見る飯豊本山の肩の辺りに、幾條もの白線がある。はて、あんな地層は初めて見るがと怪しんだ。近寄ると、それは季節風向に並列した、岳樺だけを白くした初冬の悪戯であった。御鏡雪は吃驚するほど小さく残り、その上から玄山道へ入る。ここも破状に荒廃していた。駒形山の岩峰を越す時は、もう吹雪である。ゆったりとたゆみなく、営々と進んで飯豊本山の一等三角点に集合は一時半、パンザイは叫んだが、鐘



ビールは出なかったが、皆んなの表情は明るかった。もうこれ以上登る高さはないのだから。

飯豊山神社小屋へ二時に入り、飲食をとって、長い休息をした。あるいはこれが最後、これは今生の見納めとなろうと、靴紐を結び直した。一王子宮殿跡から御前坂の道もひどく乱れていたが、左側の旧道に添うように下る。御秘所の岩稜に、今さらにバランスの悪くなった体を自覚する。姥権現の乳房豊かな石像よ、さようなら。草履塚の双耳峰も緩登不休で過

ぎる。ムシトリスミレのカーボイのシャッポの葉は見つからないが、コケモモの紅葉は多かった。御秘所沢の雪渓跡を伝えれば、もう先着の若衆が水を汲みにきた。

切合小屋は五時。会津から矢田目、小椋会員と外一名が、地酒の銘酒をどっさり背負って先着し、二階全部を分捕ってわれわれを待っていた。飲むほどに食うほどに歓声はつきないが、風の吹越しの鞍部で夜は寒い。早く寝て、三時間毎に外出した。オリオン座が傾き、北斗七星が代る。ああもう冬の夜空だ。筒先の飛沫が米沢の街の灯に写るようだ。明日は快晴だと、身震いして引込んだ。

十月八日 晴 現地小集会 快晴の朝だ。来光だと騒がしい。飯豊鉦泉の小椋は歓迎の仕度があると、早発して行った。六時に出て、種蒔山を過ぎるとき、朝日に輝やく大日岳から御面岳の稜線に、御西小屋を高く仰望した。

三国岳は八時。昔なら天狗の餌食のアベックの散歩。今は珍らしくないのだろう。続々と登ってくる登山者に行き会う。駒ガ峰の岩稜の刃渡りは恐い。足駄で飛び歩いた昔が思いやられるばかりだ。石英粗面岩より成るタカツコ沢を足元より見下ろしていると、地元

## ブラヴァンド氏の

### 山案内人手帳 (2)

横智雄氏の山行

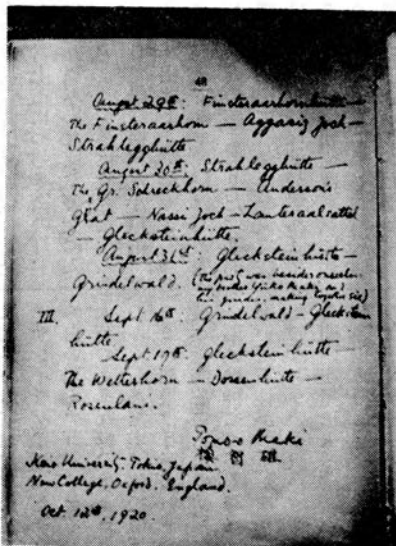
岡 沢 祐 吉

「p. 48.

August 29 th : Finsterarhornhütte—The Finsterarhorn—Agasizjoch—Strahleggshütte.  
August 30 th : Strahleggshütte—The Gr. Schreckhorn—Anderson's Grat—Nassjoch—Lautersattel—Gleckssteinhütte.  
August 31 th : Gleckssteinhütte—Grindelwald.

(The past was besides ourselves my brother Yūko Maki and his guides, making together six.)

Sept. 16 th : Grindelwald—Gleckssteinhütte.



<山案内人手帳>48ページ 横智雄氏の筆跡

Sept. 17 th : Gleckssteinhütte—The Wetterhorn—Dossenhütte—Rosenlau.

Tomoo Maki

Keio University, Tokio, Japan.  
New College, Oxford, England.

Oct. 12 th, 1920

八月廿九日＝フィンステルアールホルンヒュッテ—フィンステルアールホルン—アガシヨッホ—シュトラールエグヒュッテ。  
八月卅日＝シュトラールエグヒュッテ—グロスシュレックホルン—アンダーソン稜—ネスィヨッホ—ラウテルアールザッテル—グレックシュタインヒュッテ。

八月卅一日＝グレックシュタインヒュッテ—グリンデルヴァルト。(ここまでは私たちの他、弟の横有恒とそのガイド達と一緒に、都合六人だった)

九月十六日＝グリンデルヴァルト—グレックシュタインヒュッテ。

九月十七日＝グレックシュタインヒュッテ—ヴェッカーホルン—ドーゼンヒュッテ—ローゼンラウイ。

日本、東京、慶応大学  
英国、オックスフォード

一九二〇年十月十二日

横智雄氏の記録である。我々は当時ヨーロッパで活躍された方の多いのを知っている。しかし記録として残っているものがないと、その詳細はわかりにくい。

労の体でできた小出は生来の凛々しさを損ねていない。日時の遺繰りに心配の近藤とともに、登山用の小道具と、口へ放りこむ甘味を、次々とザックから出してくれた。山白し渡り急ぐか群れ燕

さあ、もう後は木ノ根坂の樺林を駆け下るばかりだ。ドングリの実を踏んだり、葎を採ったりだ。御沢に車が待っていた。飯豊鉾泉は沸いていた。例の如くバンザイとカンパイは書くまでもない。アネサの歌も一層の興を添えた。

矢田目の車で佐竹と私は、東吾妻山の新野地温泉へ走った。今は北海道在住の星会員と二人で、戦争時の正月スキーで越した樺林の中の、横向温泉の一軒屋に若い兄弟が越年していた。それが今は、往復の車のライトが続きわたっている。定刻より少し遅れて相模屋旅館に着いた。白濁適温の温泉に時間を構わずひたっていた。福島支部現地小集會に出席。初めの時越後、山形、福島の三支部

は兄弟分であった。今は山形、福島、宮城の構図のようだ。山と交通と気象から似たものが固まればよい。自己紹介に立つ番になる。地方山岳会のあり方は、地域研究につきると私は云った。そうだとすると、同一地域を共同で切磋琢磨すればよい。行政区など問題ではない。研究点を中心とした組織の生れるのは当然のことだ、と変な挨拶になった。そのうえ、来年あたりに越後と福島の会合を持って、問題点を討議してみたいとも云ったことを付言しておく。

明日からの吾妻山群の遊歩、泉浴の本部のお歴々に久瀧をのべ、相模会員の厚意を謝して、喜多方へ戻り、明日からお天気であれぱいと思ひながら寝た。女心と秋の空だ。当てになるもんかと私の心は、十日の弥彦山頂の御神廟祭の出席が気になっていた。

\*

### ルーム基金応募者

#### ご芳名 (15)

(昭和53年11月15日現在)

敬称略・順不同

〔東京の部〕 一口一万円 数字は口数(一) 篠田一郎、佐々木清治  
小計 二名 金二〇、〇〇〇円  
累計 六〇一名 一一五三・九口

金二一、五三九、〇〇〇円  
〔地方の部〕 一口五千円 数字は口数(一) 西岡京治(一) 三日月直之  
小計 二名 金一三、八〇七円  
(西岡氏は\$50の換算値)  
累計 五三四名 一一八三・三口

金五、九一五、〇〇〇円  
大累計 金一七、四五四、〇〇〇円  
申込人員 東京 六〇一名  
地方 五三四名

### ブラヴァンド氏の山案内人手帳(2)

横さんの書かれたものから、その活躍されている様子を垣間見ることはできたが、横智雄氏自身で記録されたこの山案内人手帳を見て私はより一層くわしくその様子を知ることができた。横さんの「山行」から推して、八月二十八日はユングフラウヨッホからコンコルディアヒュッテ。さらにそこから東してグリュンホルンヒュッテを越え、フィンステルアルホルンヒュッテへと約七時間の氷河山行をおこなったことになっている。八月二十九日はヒュッテからフギザッテル経由でフィンステルアルホルン、アガスイヨッホ、シュトラールエグヒュッテと

なっている。この間の様子は「山行」にくわしい。アガスイヨッホからフィンステルアルホルンへのルートは、ほぼ45度の急斜面で、雪崩と落石の脅威にさらされながら、クローワールを約三時間降りることになる。十数年後、逆のフィンステルアルホルンヨッホの方からこのコースを辿った舟田三郎氏も、ここで結構にこずられたらしい。「登りも、くだりも所要時間にはほとんど変りがない」とSACの案内書には記入されている。八月三十日、シュトラールエグヒュッテを早朝に出発し、ガアグを通りシュレックファイルンに出て、ここから再び45度の急峻なクローワールをシュレックザッテルまで登るのが当時一般ルートとされていた。青氷をカッティングしながら、同じ場所でも雪崩に遭われた辻村伊助、近藤茂吉両氏を思ったと、横有恒氏は書かれていた。その遭難から六年たったこの同じ日、三十一歳になられた辻村氏は、ローザ夫人や子供方とインタラーケンに滞在されていた筈である。この年の七月までの山の天気は、登山日和が続いたとは言えず、ご存知のように故郷に失意を抱かれたと言われるローザ夫人や子供方のことを思えば、充分な山登りはできなかったのではないかと察せられる。

クローワールのあるシュレックホルン南面は、最近まで直接山頂へ達するルートがなく、シュレックザッテルか南西稜を経て山頂へ達するのが普通だった。最初のスイス人エベレスト登頂者、E・ライスらによって一九四九年はじめて完登されている。

シュレックホルンからアンダーソン稜にかけて、景色もルートもすばらしい、と今のSACクラブフェーラーは記している。アンダーソンを案内したウルリッヒ・アルマーはグリンデルヴァルトの山案内人でもある。

ネスイヨッホからラウテルアルザッテル経由グレンクシュタインヒュッテへの行程はほとんどが氷河歩きで、特に雪の状態が良ければ、ネスイヨッホへの取付地点とヒュッテとの間は現在スキーで行けるということだ。

横智雄氏はさらに九月十六日、十七日、ヴェッターホルンへと足をのばす。今、一般ルートと言われているところだが、天候が悪く岩に氷でも張りつくと、グレードは六級にまでなる所だ。山頂からヴェッターザッテルにおり、ヴェェルホルンザッテル、さらにドーセンザッテルまでの約四時間、無数にシユパルトを隠した雪原が続く。

このようにして終った横智雄氏の記録を見て私は数年前AACBの会報に載った日本人のことを思い出した。隠れた記録は、いままなおかなり多いのではないかと思う。

#### アイガー東山稜

「p. 50~52」

ブラヴァンド君とは昨夏来の岳友なり、同氏は当村の小学教師たると同時に、凡ての好性質を具えたる案内なり。血が山をこがれると言ふ詞の如く、ヴェッターホルンに死せし同君の父の名を耻しめざる人格の所有者なり。年末

## 二十周年記念の会二つ

成瀬 岩 雄

## 一、南会津山の会

大体が会津の山を主として歩く

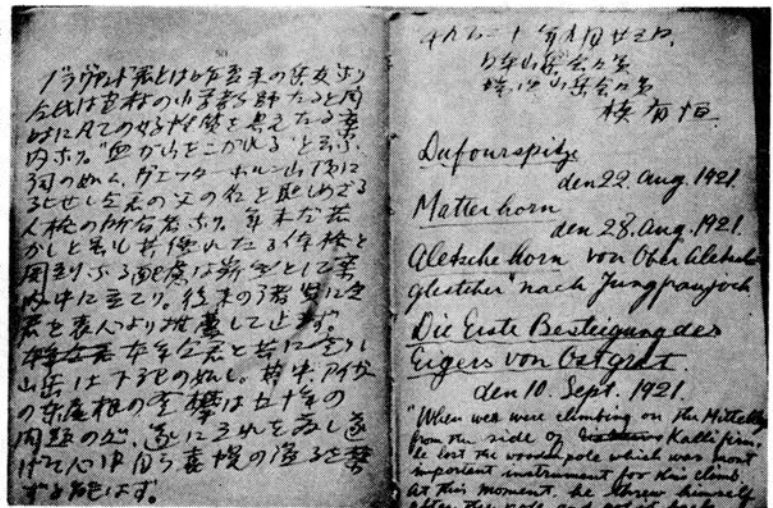
山岳書はない……と蔭ながら喜びかつ座右の書としている次第である。

というところで発足した会で、会員は郡山、福島、若松等、会津の蔵山をかこむ地方の諸氏が約半数、東京、その他の地区の人が約半数の総勢五拾名位の会で、会員数もこれ以上は増さないという決めがあり、会長とか理事とかそんな堅い、会員の誰もおかず、事務所もない、会員の誰かが理事であり会長でもある山の会であるのも面白い。名称が南会津というだけあって会津の山はほとんど偶々まで、会員の誰かが登っており、高度は最高、せいぜい千五、六百米程度ではあるが、まず人気のないことと静けさの点では申し分のない「山歩き」を語り合う楽しい会である。会員の動勢を伝える「いろいろ」という会誌も毎月発行され、本会の会員でもある小滝清次郎君の写真等は玄人はだしの立派なものである。最近「静かなる山」という山岳書が出版されたが、この書の執筆者四名はいずれも南会津山の会員で、小生もこの四人の御連中の誰ともしばしば山行を共にし、最近出版された山の本でこれだけ「日本の山」の楽しさを語る

去る拾壹月初旬、創立二拾周年記念の会合を福島県の二岐温泉で催したが、二十歳から七拾四歳までの会員が殆んど全員近く集まり誠に楽しい会合であった。勿論、日本山岳会の会員も多数この南会津山の会の会員になっている者が多いし、日本山岳会の初期の木暮さんや田部さんが籤コギで苦労された時代を思い起すような登山をいままもって南会津の山々で専心続けている。特に小生が好んでこの会に出かけるのは、昔の日本山岳会の会合に近い、さながら日本山岳会の伝統を引継ぐに似たような雰囲気が集まりであり、あくまで「登ること」を第一とした会であることが気に入っているのである。

日本山岳会にはブライベートの会で「霧の旅の会」という会があるけど、木暮さんと田部さんと、神谷さん等という大先輩を亡って、今はこの会の会員数も拾名足らずになり、会員の平均年齢、六十何歳という会であるが、昔の日本山岳会の雰囲気があるが、昔の日本山岳会の唯一の山の会である。南会津山の会も程度の差こそあれ、これ

ブラヴァンド氏の山案内手帳(2)



&lt;山案内手帳&gt;50~51ページ 横有恒氏の筆跡

Dufourspitze

den 22. Aug. 1921.

Matterhorn

den 28. Aug. 1921.

Aletschhorn von Ober Aletschgletscher  
"nach Jungfraujoeh."

Die Erste Besteigung des Eigers von Ostgrat.

Ostgrat, den 10. Sept. 1921.

"When we were climbing on the Mittellegi from the side of Kallifirn, he lost the wooden pole which was most important instrument for this climb. At this moment, he threw himself after the pole and got it back. Not thinking of a bit after his own safety! I couldn't keep from the tears came down.

The life is mystery. We do something. After ambitious? No! Absolutely not. Only want to be truthful.  
22nd, Sept. 1921.

Yuko Maki.

S.A.C. sect. Grindelwald.

J.A.C.

デュフォウルシニェビツ

一九二一年八月廿二日

マッターホルン

一九二一年八月廿八日

アレッチホルン オーベルアレッチ氷河から。ユングフラウヨッホへ向かう。

アイガー東尾根からの初登

一九二一年九月十日

「カリフィレン側からミッテルレギを登攀している時、彼はこの登攀でもっとも重要な道具、木製のポールをとり落した。その瞬間彼はポールを追って身を投げ、これを取りもどした。彼

千九百二十一年九月廿三日、

日本山岳会々員

瑞西山岳会々員

横 有 恒





感謝の言葉で、ここに永年、入れ代りたち代り訪ねてきた英国山岳界の会員の誰もが抱いていた感謝の言葉を代表したものであるが、日本での言葉にピッタリ相当する宿屋を見つけるとすれば正にこの戸隠小舎であると小生は確信する次第である。

主人夫妻がこうだから下で働く従業員やアルバイトの人達一同も懇切丁寧な応待はいわずと知れたことである。夫人も先年、フランスに出かけ料理の勉強に専心し、今はこの小舎で出す一日の食事はイタリアのラザーニアを初め一流のホテル並みのスूपで、いわゆる山小舎と思って訪ねてくる宿泊者は皆意外の御馳走に驚いている。洋食の極意はコックのスूप作りの上手、下手で判る、と聞いたことがあるが、この小舎で都会の一流ホテル並みのスूपが味えようとは誰しも想像しないものである。

陽当りのよい、明るい食堂の窓わくに真紅に咲く、サルビヤの鉢の葉陰を通して、岩峰の重なる戸隠連峰を眺め、あるいは時には書棚にギッシリ詰まった山岳書の頁をめくるのも、山奥の「山岳図書館」といいたいところだ。

もう一つ声を大にしてこの小舎の誇りとするところを云うと……「麻雀、テレビ、ラジオは厳禁、消灯時間は拾時」と判然揭示されていることだ。勿論、週刊誌、マ

ン画本等はない。あの雰囲気ではたとえ週刊誌を持ち込む初めての訪問者も恥かしくて思わず引込めしてしまうようだ。

佐々木君とたびたび話したことが——この小舎の名称は当世流行の何々荘、洋名をもじった名称等は絶体止めて立派な日本語の「戸隠小舎」で通そうじゃないか……と話し合ったものだ。

この小舎の雰囲気について語ればまだいくらでもあるが、畏友であり、日本山岳会会員でもある佐々木君の提灯持ちもこの位にして、要は実際にこの小舎を訪れることを本会員各位に御勧めする次第である。先年、拾週年記念の会にも亡き神谷さんと共に招かれた節、小生は「今度は佐々木二世を早く作らなければ……」と夫妻を前にして御祝言兼激励を述べたものだが、今はわれわれのこの願いも立派に実現され、一男一女の明るい家庭となり、先に述べたようにこの小舎はわれわれのよきハイマートであり、山岳図書館であり瞑想の場でもあるのだ。

今回の二拾週年記念の会合に本会では石原憲治さん、野口末延さん、渡辺公平さんも出席され、いづれも衷心より感謝の辞を述べられ佐々木夫妻も喜んでくれたようだ。

周辺の景観、これにマッチした建物、親切な主人夫妻従業員、黒姫山、飯縄山、戸隠山、高妻山等

いずれもこの小舎より日帰り登山の出来る位置にあり、これだけ揃った小舎はまず日本では他にないのではないかと……。

(一九七八・十一・十三記)

### 上高地山研だより

訪れる人も少なくなった上高地山研は、去る十一月十二日(日)閉所いたしました。白一色に薄化粧した穂高の峰々、親子猿に見送られ、管理人の津村夫妻も元気で下山いたしました。

多くの会員のご利用を望んでおりますが、利用者数は前年度とほぼ同数でした。

混雑を予想されたためか、八月の利用者は前年度より六十名ほど減、来年度はご家族とともどもぜひ夏休みをご利用ください。

無断キャンセルいたしますと、他の会員にも迷惑をかけますので、早目にご連絡ください。

53年度は非会員の利用者が多かったため昨年度よりわずかながら収入増となり、収支は赤字をまぬがれましたが、設備、修理費が

さむ時期となりますので、会員皆さまのご利用とご協力を切望いたします。

### 利用者状況

| 53年度 | 52年度 |     |
|------|------|-----|
| 269  | 276  | 会 員 |
| 497  | 465  | 非会員 |
| 34   | 34   | 小学生 |
| 15   | 35   | 小 人 |
| 815  | 810  | 計   |

(山研運営委員会・小倉)

### ●図書受入報告

#### 図書委員会

昭和 53 年 9 月・10 月受入和書

1. 西岡京治・里子著「神秘の王国」学研 昭53 (西岡氏寄贈)
2. 森本次男著「復刻・樹林の山旅(奥美濃紀行)」サンブライ出版 昭53 (版元寄贈)
3. 坂井久光「関西とその周辺の山」創元社 昭53 (坂井氏寄贈)
4. ディレンフルト著 福田宏年訳「ヒマラヤー第三の極地」白水社 昭53 (版元寄贈)
5. 1976年チャンガバン登攀隊編「Changabang S.W. Ridge」昭53 (戸田直樹氏寄贈)
6. 山形高校・山形大学山岳部同窓会・コーボルト会編「コーボルト・その50年」昭53 (森元芳氏寄贈)
7. クリレンコ著 田村俊介訳「未踏のパミール」白水社 昭53 (版元寄贈)
8. 飯田睦治郎解説「雲・野外ハンドブック」山と溪谷社 昭53 (版元寄贈)
9. 森宏子 田村協子 小倉童子 吉見愛子著「砂漠のパラ・パルカンのパラ」集英社 昭53 (小倉童子氏寄贈)
10. 村井米子著「山恋の記」新人物往来社 昭53 (村井米子氏寄贈)
11. 愛媛大学山岳会「クックを行く

- ・ニュージーランド学術登山報告書」昭48 (金坂一郎氏寄贈)
12. 同人大阪登攀倶楽部カラコルム登山隊「タフルタム」昭53 (桑原信夫氏寄贈)
13. 鈴木茂徳著「登山教室4・沢登り」山と溪谷社 昭53 (版元寄贈)
14. 細田充著「登山教室1・計画と用具」山と溪谷社 昭53 (版元寄贈)
15. 越中山座同定グループ編「越中山座図巻」北日本新聞社 昭53 (版元寄贈)
16. 横有恒他「写真集・日本の山」毎日新聞社 昭53 (版元寄贈)
17. 新潟大学山の会・新潟大学山岳部「飯豊第9号・ソビエトの山々他」昭53 (版元寄贈)
18. 大暮英雄・仁一編「木暮理太郎翁」昭53 (版元寄贈)
19. アジア経済研究所編「発展途上国地域地図目録」1971年(購入)
20. 坂原忠清・ズビダーニョ同人編「オクサスの雪」昭53 (版元寄贈)
21. 国鉄山岳連盟編「全日本一斉登山」昭53 (加藤孜氏寄贈)
22. 国立国会図書館編「国会図書館所蔵・深田久弥旧蔵書目録」丸善 昭53 (購入)
23. 立山連峰の自然をまもる会編「第1回蔵冬期雷鳥調査報告書1978年2月」昭53 (版元寄贈)



## ・ 図 書 ・

## 三つの記念出版

島 田 巽

昨秋、次のような三種の記念出版が行なわれた。

## 『コーボルト——その五十年』

昭和三年、山形高校山岳部の手で蔵王三宝山神岳中腹にヒュッテが建設され、コーボルト・ヒュッテと命名されて親しまれた。昭和三十四年に閉鎖されて、現在は昭和四十四年に八方沢源頭に二代目の小屋が再建されており、初代から通算五十年を迎えるに当って、立派な文集が編み込まれた。創建当時の若い情熱が見事に記録されているとともに、大正九年から昭和五十一年に至る高山山岳部の年表は詳細をきわめて、登山史料としても無視できない。

編集 コーボルト五十年記念誌編集委員会、発行 コーボルト会——本部・東京都大田区山王一丁目二ノ三 五十嵐力方。昭和五十三年九月七日刊、A5判四四九ページ

## 『三角岩』

松木喜之七、酒井由郎の両氏は、新潟県長岡に生まれ、登山とスキーについて郷党を指導して知

られていたが、ともに昭和二十年戦死された。昭和五年四月、スキーによる苗場山初登頂などの業績を顕彰する銅板が一昨五十二年、神楽ヶ峰の三角岩にはめ込まれ、さらに三十三回忌を迎えて、松木氏の短歌、酒井氏の俳句を取めるとともに、追憶の文章を集めて、本会会員、金山淳二氏によってまとめられた。望月達夫、藤島玄両氏らの寄稿もあり、望月氏によって松木氏が本会会員（昭和六年入会、番号一二七三）であったことも明らかにされている。酒井氏は松本高校時代、部報「わらぢ」を本会会員小池新二氏とともに創刊したが、さらに小池、赤沼千尋氏らとともに雑誌「山に思ふ」の編集にも加わった。ともに惜しまれるに値する郷土の先覚であった。

## 『中央線』

山梨県韮崎市に本拠を置き、「一、郷土の文化を愛し、その発展を希願する。二、文学を愛好し、その精髓を究めんとする」ことを目的として「中央線社」が結ばれ、同人誌として「中央線」が発行されている。その第十六号が、「野尻抱影先生追悼号」として、この山国に縁の深い故人を、十人の執筆者がいろいろな面から追想している。さらに甲府中学校校友会誌に寄せた故人の遺稿を複製版で再生して、若き日の抱影像を鮮かに伝えているのは嬉しい。

## ・ 図 書 ・

## 『コンサイス 日本山名辞典』について

昨年十一月の書評委員会で、この辞典の紹介を私がすることになった。ところが、その折に、その辞典は発行所が回収中という噂があるから確めたほうがよいとアドバイスを受けた。早速、三省堂に問合せたところ、やはり噂は本当であった。本年二月ごろに修訂版を出す予定であり、それまでに販売したものと無料で交換するとの答えであった。修訂版を出す理由は、誤まりが多いためとのことである。現在、以上のような過程にある本をあえてこまごまと紹介してもはじまらないと思うので、修訂版を手にした時点で、あらためて取りあげることにした。

(横山厚夫)

## ● 報 告

## 第21回技術講習会報告

(富士山)

4月14日(晴) 富士吉田駅集合、スバルラインを自衛隊のトラックにて五合目まで入り、佐藤小屋經由六角堂の所に班別に募営する。4月15日(晴) 夏道より富士山登頂を含む雪上技術講習会を9班に分散行。4月16日(曇) 往路を下山、富士吉田駅前に解散。△参加人員▽講師14名、講習生30名。

52年11月は積雪少なく講習会を中止し、また今回も国鉄ストと重なり講習生の集まりが当日まで心配であったが、熱心な講習生のため予定通り全員集合。春富士はちょうど良い堅さの積雪状態と天候にめぐまれ、登頂を含む幅広い講習会を実施出来た。なお入下山時の自衛隊のご協力に厚くお礼申し上げます。(指導委員会)

## 第11回図書交換会

図書委員会

図書委員会主催の行事の一つである恒例の図書交換会を昨年十月二十一日、本会ルームにおいて行った。

十一回目を迎えたこの行事も、会員相互の図書交換という本来の

目的のほかに、図書室の欠本等の補充という効果もあって、今では欠かすことのできない行事となった。

今年も十八名の会員(遺族を含む)から五百冊余の図書の出品をいただき盛大な交換会となった。特に今年は、故町田立穂氏のご遺族から多数の図書の寄贈を受けこのうち重複本の一部については前号報告のとおり、今回の図書交換会に出品させていただいた。

山好きには愛書家が多いとみえ毎年出席している常連も含め、今年も五十二名の来会者があった。午後二時に開会、山崎委員長の挨拶のち、希望重複本の抽選に移った。例年どおり筆を使つての抽選方法によつたが、大部分の本は複数の希望者があり、抽選となった。

とくに希望者の多かった本は、今西錦司著「山と探検」(岡書院版)の十七名を筆頭に、同じ著者の「山岳省察」に十六名、吉田二郎著「鹿島槍研究」に十五名、平賀文男著「日本南アルプス」に十四名などであった。このほか高橋文太郎著「山の人間」川崎隆章編「日本名山紀行」西岡一雄著「山村好日」にそれぞれ十三名、また田部重治著「日本アルプスと秩父巡礼」、鹿子木員信著「ヒマラヤ行」、加藤文太郎著「単独行」、冠

松次郎著「雲表を行く」にそれぞれ十二名の申し込みがあった。洋書部門では、アーノルド・ランの「The Alps」に八名の申し込みが目立った。

希望図書の内容は、特定山城の研究書や紀行集、評価の定った随筆集等に特に人気が集まったようであった。

また出品図書のうち、稀覯本に類するものについては別に入札に付した結果、小島島水著「日本アルプス」全四巻が底値十万円に対して十六万五千円で落札、辻村伊助著「スウィス日記」(梓書房版)および「ハイランド」がそれぞれ五千円の底値に対して一万二千五百円と一万一千円で希望者に渡った。このほか大島亮吉著「山・研究と随想」が一万五百円、松方三郎著「アルプスと人」が八千円でそれぞれ落札された。

今回の図書交換会の総売上額は四十四万五千三百円となり、規定によりこれから山岳会ルームおよび図書委員会にそれぞれ一〇%ずつ寄付していただいた。なお町田家寄贈本のうち交換会出品分については、その売上額のすべてを図書出版、研究基金に繰り入れさせていただいた。

町田家および出品者各位に厚くお礼申し上げます。(松家 晋)  
(出品者 敬称略、順不同)  
故町田立穂氏遺族、川崎精雄、橋爪幸達、浅原重雄、坂倉登喜子、

斎藤かつら、島田翼、神谷恭平、加藤隆、山崎安治、伊藤博夫、浜田一馬、千葉保之、石川治郎、折井健一、中川恵資、沼倉寛二郎、飯田進。

### 第三七五回小集会

#### 甲州高尾山山行

十一月十九日、勝沼駅に集合した今回の日帰り山行では、大家族パーティで日だまりハイキングを楽しみました。

(参加者氏名) 横山厚夫、横山泰子、吉阪隆正、吉阪岳子、鈴木郭之、山田哲郎、河野幾雄、小林奈奈子、菅野弘章、中川昭子、小川武、小川泰子、三輪良之、園児二名、小学生三名

集会委員 中川武、加藤隆、藤本敏行、佐藤裕、中沢光江

#### 甲州高尾山に登る

##### 高一 吉阪 岳子

この間の十一月十九日(日曜日)に日本山岳会の山行があると父から聞き、日帰り山行でお鍋が食べられるというので楽しみに参加しました。

朝5時にねむい目をこすりながら起きました。大久保駅から中央線に乗って高尾まで行き、そこから甲府行に乗って勝沼駅まで行きました。その間私はねていました。それからしばらくたって出発しました。初めの三十分は順調でしたが、

杉林のあたりから藪の中に入ってしまった。途中で幼稚園ぐらいの子や小学校の二年生ぐらいまでの子供達の一人がお父さんに「茨があつて通れないよう。」と「ここもある。」といいました。二時間近くそういう所を歩いて尾根筋につき、そこで二十分ぐらい休憩してからまた歩き出しました。その時は藪はもうなく、ちゃんとした道がついていました。

三十分ぐらい歩いてカブミラーが見え、「あれなんだ?」「変な所に太陽が登ったぞ!」と何人かの人がいいました。もうちょっといくとガードレールが出て来て、先にそこに着いていた人達がガードレールに倚りかかっているのがみえました。そこまでいったら車が通れるほどの広い道になっていました。そこへ生コンの車が通って来ました。

それを見て今まで苦労して登ってきたのが水の泡になった気がしました。しかたがないのでその道はないと考え、また登りました。十分ぐらいいったところに頂上がありました。でもその頂上は小さく、刈り枝がたくさんありました。私はもっと広い頂上でもっと落ち着いている所だと思ったのでちよっぴりがっかりしました。

しかし、食糧が豊富で色々な物が入っている豚汁の鍋を食べべたし、藪の所もけっこうたのしかったです。

たので「やっぱり行ってよかったなあ」と思いました。またいつか行きたいと思えます。その時は、カブミラーや、

### お知らせ

#### 第23回山スキー

##### 技術講習生募集

日程 昭和54年2月9日(金) 12日(月)

場所 慶応吾妻山荘を中心とした吾妻連峰

行程 2月9日夜行出発

2月10日 福島駅前集合、バスにて高湯温泉、徒歩にて慶応吾妻山荘着、午後基礎技術練習、夕食後ミーティング

2月11日 吾妻連峰の分散スキー登山、夕食後懇談会

2月12日 午前中スキー練習、午後下山(現地解散)

費用 一人 一万一〇〇〇円(宿泊、消耗品、保険、懇談会費等含む。交通費、食費各自負担)

申し込み方法 日本山岳会事務局で電話にて受け付けます。TEL 03-261-1443、電話受付後申込み書を送付します。受付締切は1月25日。

参加者説明会及び準備会 2月5日(金) 山岳会ルーム  
主催 指導委員会・共催 福島支部

「山」合本、製本します  
会報三五一号から四〇〇号の合

ガードレールや、車が通るような道がなくもっと広い頂上で落ちついた場所へ行きたいと思えます。

本を御希望の方は、該当会報現物に、製本代と返送郵送料(計二五〇〇円)をそえて、1月末日までに、日本山岳会本部事務局あてにお送りください。

#### 山岳史懇談会

##### 女性の登山について

第6回山岳史懇談会を左記によりおこないます。お知合いの方をお誘いのうえ、ふるってご参加下さい。女性の昔の登山について楽しいお話が期待されます。

日時 2月15日(月) 午後6時

場所 本会ルーム

テーマ 女性の登山

講師 佐藤テル、山下滋子両氏

#### 青年懇談会丹沢集会

青懸恒例の西丹沢寄木山荘における猪、鹿、蝶の会(山クジラ、鹿サシ、羽化登仙の境)を左記の通り企画致しました。ぜひ御参加下さい。

日時 2月17日(土) 18日

会費 五〇〇〇円

場所 西丹沢寄木山荘

現地連絡 〇四六五八九一二六  
三三 大館三郎方

交通は御殿場線松田駅前よりバ

ス寄木行き、寄木下車

松田駅発午後六時、六時四〇分  
最終午後七時五〇分

当日担当者が、五時三〇分まで  
小田急線新松田駅にて皆様を待っ  
ています。詳細はルームまで。

### 山岳図書を読む夕

53年度の「山岳図書を語る夕」  
を左記のとおりおこないます。

日時 3月8日(木) 18時30分

場所 本会ルーム

講師 近藤等氏

フランス語圏の山の本について  
豊かな知識をお持ちの近藤等氏を  
お招きして、山の本についてのた  
しいお話をうかがいます。お誘い  
あわせのうえ、ご来会下さい。

### 会務報告

#### 11月理事会

11月6日午後6時30分

本会ルーム

▽出席者 西堀会長、望月、折井  
各副会長、高遠、小倉、中川、

橋本、大森(欠)、皆川、鈴木、  
黒石、越田、田村各理事、片岡  
監事、浜野、山崎、松丸、近藤  
各評議員

委任 宮下、牧野内、嵯峨野各  
理事

#### ▽議案

・大阪外国語大学カラコルム学術  
遠征隊(一九八〇)推薦状交付  
の件 (田村)

#### ▽報告事項

・評議員会報告 (望月)

・名誉会員推薦の件

・新選覆刻「日本の山岳名著」出  
版の件 (近藤)

・近く発売になる

山研 (小倉)

11月11日閉所

図書 (越田)

10月21日第11回図書交換会

12月2日この一本展

山岳 (近藤)

・年次晩餐会には出来る予定

海外連絡 (鈴木)

・オーストリア山岳クラブ百年祭  
の招待状来る

UIAA総会より丹部氏帰国

高所登山 (田村)

・ソ連山岳連盟よりパミール・コ  
ーカサス国際登山キャンプの案  
内来る。

集会 (中川)

10月28日第2回ノミの市

11月19日甲州高尾山・日帰り山  
行

12月17日もちつき大会(教学院)

婦人懇談会 (黒石)

11月8日・三田幸夫氏の話を開  
く会

・青年懇談会 (橋本)

・日独交流登山会計報告

・青年懇談会

・日独交流登山会計報告

・青年懇談会

・日独交流登山会計報告

・青年懇談会

・日独交流登山会計報告

・青年懇談会

・日独交流登山会計報告

・青年懇談会

承認 13日(金) 学生部委員会

14日(土) 創立記念日

16日(月) 理事会

18日(水) 図書委員会、三水会

20日(金) 学生部

21日(土) 図書交換会

24日(火) 自然保護委員会

26日(木) 高所登山委員会・婦人  
懇談会

27日(金) 学生部 指導委員会

28日(土) のみの市

30日(月) 図書委員会

31日(火) 婦人懇談会

今月の来室者 六三一名

△編集から▽年末年始はこの山  
でお過しでしたか。本年もよろし  
くお願い申し上げます。(大森)

昭和五十四年一月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五十四

サンビュハイム四番町

発行所 社団法人 日本山岳会

発行者 西堀栄三郎

編集代表 大森久雄

電話東京(03)四四三三

振替口座東京三三二八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号  
株式会社 技報堂